

# 博多117

—博多遺跡群 第162次調査報告—

2007

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人・物の交流は盛んでその結果数多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査をおこなって記録保存という形で、往事の有様を後世に伝えています。

本書は平成18年におこないました、博多162次調査の内容について報告するものです。この調査では古代末～中世前半期を中心とする数多くの遺構、遺物を検出することができました。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとするご協力をいただきました、大平明弘氏をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

—例　言—

- ・本書は福岡市教育委員会が2006年5月1日から6月21日にかけておこなった博多162次調査（博多区冷泉町422番）の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- ・本書における輸入陶磁器の分類は以下の文献を参照した。  
太宰府市教育委員会編『太宰府条例跡』X 太宰府市の文化財 第49集
- ・本書の編集は藏富士がおこなった。遺物の実測については筆者の他、米倉法子の手を煩わせた。
- ・本書における方位は座標北であり、遺構については、井戸（SE）、土坑（SK）、溝（SD）、墓（ST）といった略号を使用している。
- ・本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

## 目 次

I.	はじめに .....	1
1.	調査に至る経緯 .....	1
2.	調査の組織 .....	1
II	調査の経過 .....	2
1.	位置と環境 .....	2
2.	調査の方法 .....	2
III	調査の記録 .....	3
1.	遺跡の概要 .....	3
2.	遺構遺物 .....	3
1)	SK (土坑)、SE (井戸) .....	3
2)	SD (溝) .....	19
3)	ST (叢棺墓) .....	21
4)	その他の遺物 .....	21
IV	まとめ .....	21

## 挿図目次

図1 博多遺跡群 (1/25,000) .....	2	図14 SK080 (1/40、1/3) .....	13
図2 調査区位置 (1/2,000) .....	3	図15 SK084 (1/40、1/3) .....	14
図3 SK004 (1/40、1/3) .....	3	図16 SK096 (1/40、1/3) .....	14
図4 造構配置 (1/120) .....	4	図17 SK111・112 (1/40) .....	16
図5 SK006・SE007 (1/60、1/3) .....	5	図18 SK113 (1/40、1/3) .....	16
図6 SK013 (1/40、1/3) .....	6	図19 SK120 (1/40、1/3) .....	17
図7 SK015・016 (1/40、1/3) .....	7	図20 SK124 (1/40、1/3) .....	18
図8 SK021 (1/20) .....	8	図21 SK127 (1/40、1/3) .....	18
図9 SK021出土遺物 (1/6、1/3) .....	9	図22 SK130・131 (1/40、1/3) .....	19
図10 SK022・023 (1/60、1/3) .....	10	図23 SD020・040・054 (1/200、1/40、1/3) .....	20
図11 SK027 (1/40、1/3) .....	12	図24 ST052 (1/10、1/6) .....	20
図12 SK037 (1/40、1/3) .....	12	図25 その他の遺物 (1/3) .....	22
図13 SK048 (1/40、1/3) .....	13		

## 図版目次

図版1 上 調査区北側1 (北東から)		下 調査区南側1 (南西から)	
図版2 上 調査区北側2 (南から)		下 調査区北側3 (北東から)	
図版3 上 調査区北東側 (北西から)		下 調査区南側2 (南西から)	
図版4 上 SK037 (北西から)	中 SK048 (北西から)	下 ST052 (東から)	
図版5 上 SK080 (南東から)	中 SK084 (北西から)	下 SK096 (南から)	
図版6 上 SK124 (南東から)	中 SK127 (南東から)	下 SK048周辺 (北西から)	
図版7 上 SK004 (北西から)	中 SK006 (北西から)	下 SK021 (北東から)	
図版8 出土遺物			

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成16年11月22日、大平明弘氏より、博多区冷泉町422番における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。この地点は博多遺跡群の範囲内であることから、埋蔵文化財課では試掘調査をおこない、現地表下1.7mにて遺構の存在を確認した。

この結果を受けて、数度にわたる両者協議の結果、遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という形での対応が採られることになった。

発掘調査の開始は平成18年5月1日。6月21日にはすべての作業を終了した。調査に当たって、大平明弘氏、大同建設株式会社をはじめとする関係各位には多大なご協力を賜った。記して感謝したい。

### 2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託	大平明弘			
調査主体	福岡市教育委員会			
調査総括	埋蔵文化財第1課 課長 山口謙治 調査係長 山崎龍雄			
調査庶務	文化財管理課	鈴木由喜		
調査担当	埋蔵文化財第1課 調査係	藏富士寛		
調査作業	阿部幸子 川田強司 小池温子 小路丸嘉人 指原蛤子 渋谷一明 中野裕子 中村桂子 永田律子 夏秋弘子 畠野雅基 保坂由美子 増田ゆかり 吉川暢子			
整理作業	柴田加津子 萩本恵子 日名子節子			

遺跡調査番号	0612		遺跡略号	HKT-162	
地番	博多区冷泉町422番		分布地図記号	48 千代博多	
開発面積	280m <sup>2</sup>	調査対象面積	175m <sup>2</sup>	調査面積	190.7m <sup>2</sup>
調査期間	2006.5.1～2006.6.21				

## II. 調査の経過

### 1. 位置と環境

博多遺跡群は古代末から中世を中心とし、存続期間は弥生時代から近世にいたる複合遺跡であり、福岡平野を流れる那珂川、御笠川に挟まれた砂丘上に存在する（図1）。この砂丘は東西に長い3列の砂丘によって形成されており、通常、内陸側の二列を「博多濱」、外側の一列を「息濱」と呼んでいる。今時調査地点は「博多濱」の中央部やや西寄り、比較的高所の砂丘上に存在している。近隣においては北東～東側100m程の地点において、10次（池崎・折尾編1981）、44次（佐藤編1991）、148次（藏富士編2006）の各調査がそれぞれおこなわれており（図2）、11～12世紀前半を中心とする数多くの遺構が検出されている。また、148次調査では弥生時代終末の豪棺墓も見つかっており、当該期における遺構の広がりにも注目される。

池崎譲二・折尾 学編1981『博多1』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第66集

佐藤一郎編1991『博多19』—博多遺跡群第44次発掘調査概報—福岡市埋蔵文化財調査報告書 第247集

藏富士宣編2006『博多107』—博多遺跡群第148次調査報告—福岡市埋蔵文化財調査報告書 第893集

### 2. 調査の方法

調査はまず、表土及び擾乱土の搬出より開始した。深さ1.7mにまで及ぶそれらを除去し、標高3.7m前後の黄褐色砂層上に遺構面を設定し、調査を開始した。この黄褐色砂層は砂丘面であり、したがって1面のみの調査であるが、砂層は數度の切り下げをおこない、遺構の精査に努めた。なお、耕土処理の関係から調査区を二分して調査をおこなった。

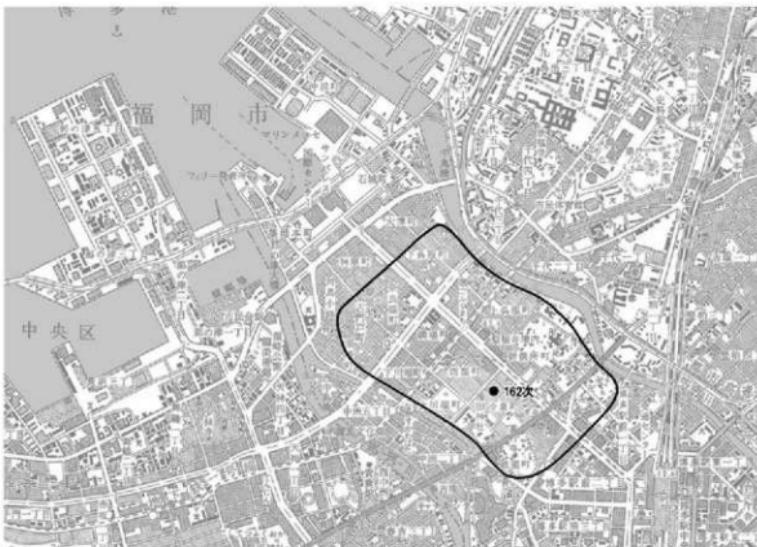


図1 博多遺跡群 (1/25,000)

### III. 調査の記録

#### 1. 遺跡の概要

今次調査では、古代末～中・近世にかけての井戸（SE）、土坑（SK）、溝（SD）、ピット（SP）等の遺構が数多く検出された（図4）。遺構は調査区全体に濃密に広がっており、古代末～中世前半のものがその主体を占める。その他の時代としては、弥生時代終末の豪富墓を1基検出でき、周辺から弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺物も散見されることから、この段階における遺構の広がりも想定できるだろう。また、調査区を縦断する溝（SD020・040・054）は10世紀代に位置づけることができる可能性がある。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、輸入・国産陶磁器など、コンテナ77箱分が出土している。

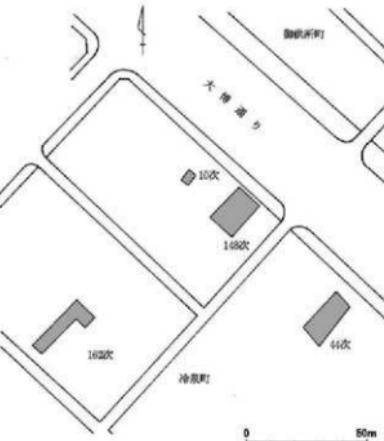


図2 調査区位置 (1/2,000)

#### 2. 遺構・遺物

以下では、遺構の種類ごとにその内容、出土遺物について述べる。

##### 1) SK（土坑）・SE（井戸）

今回検出した遺構の大半は土坑である。井戸側を検出した確実な井戸としてはSE001・007があるのみである。SE001は近世以降のもので、完掘にはいたっていない。土坑の中には平面が円形を呈し、深い掘り込みをもつものがあるが、これらの中にも本来井戸であったものが含まれている可能性も考える必要があるだろう。

**SK004**（図3） 調査区のはば中央部に存在する。平面は径1.5m程の円形を呈し、深さ0.6～0.7mを測る。底面は平坦。埋土の上層部には大量の礫が認められ、その中には若干の陶磁器、土師器が混じる。出土遺物より、近世段階に位置づけることができる。

**出土遺物** 1は土師器椀。2は甕底部片であり、器面は暗赤褐色を呈する。

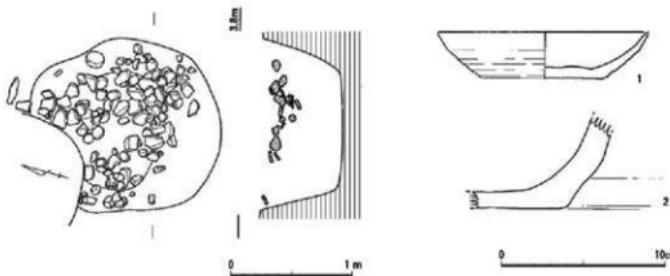


図3 SK004 (1/40, 1/3)

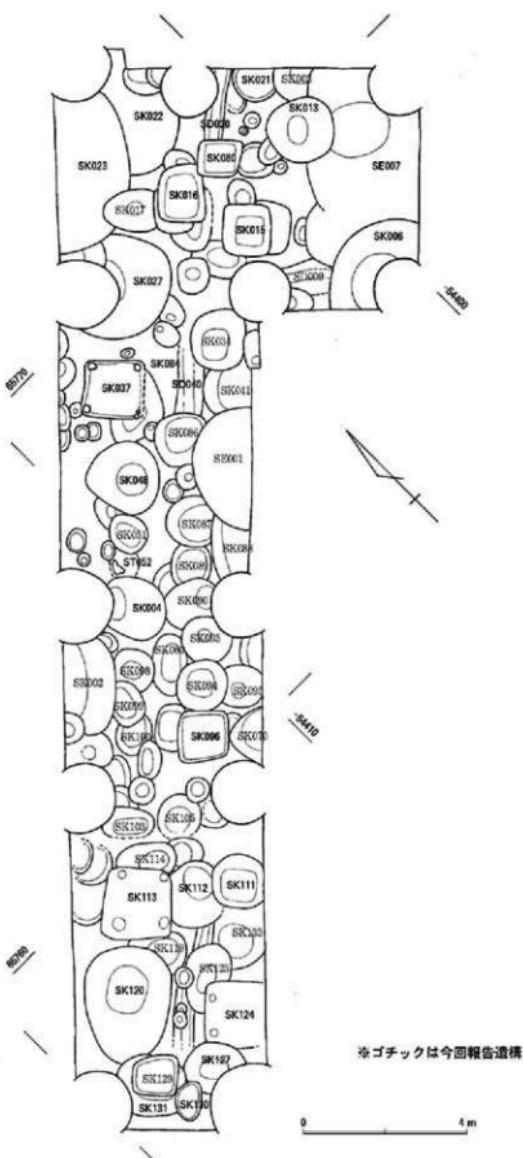


図4 造構配置 (1/120)

**SK006** (図5) 調査区東端に存在する。大部分は調査区外に存在するため、詳細は不明であるが、検出部分からは径3m程の平面円形を呈するといえようか。深さは0.6m程で、壁面の立ち上がりは急であり、上部では垂直に近い。国産陶磁器を中心とした多くの遺物が出土しており、近世段階に位置づけることができる。この土坑からは銅製品の鋳造に関連する遺物が出土し、周辺でその生産がおこなわれた可能性を示唆する(1・2)。またイルカの頭骨が2個体分、壁面に沿った形で出土している(図版7中)。

**出土遺物** 1は鋳型である。鍋等の鋳造がおこなわれたのだろう。内面上端は浅い段をなしている。2は坩堝である。内面及び上端部には銅滓が付着する。

**SE007** (図5) 調査区東端に存在し、SK006、SK013、そして不明土坑に切り込まれる。大形の井戸で、井戸側の一部が調査区法面に認められる。堀方はすり鉢状を呈し、壁面の立ち上がりはなだらかである。埋土は暗褐色を呈し、比較的均質。遺構の大半は調査区外にあり、平面形は不明である。掘り込み部分が直線を描いており、これは複数遺構の切り合いを把握できなかつたためであろう。出土遺物は少なく、また遺構の認識も不十分であったため、他遺構出土遺物が混入しており、時期決定の決め手に欠ける。しかし、SK013との切り合い関係を考慮して、SE007は12世紀後半以前に位置づけることができるだろうか。

**SK013** (図6) 調査区東側に存在し、SE007を切り込んでいる。平面は径1.6mの円形を呈し、深さ1.5mを測る。底面の高さは標高2.1m。壁面の立ち上がりは急であり、一部は垂直に近い。埋土は黒褐色で比較的均質である。出土遺物より、12世紀後半に位置づけることができる。

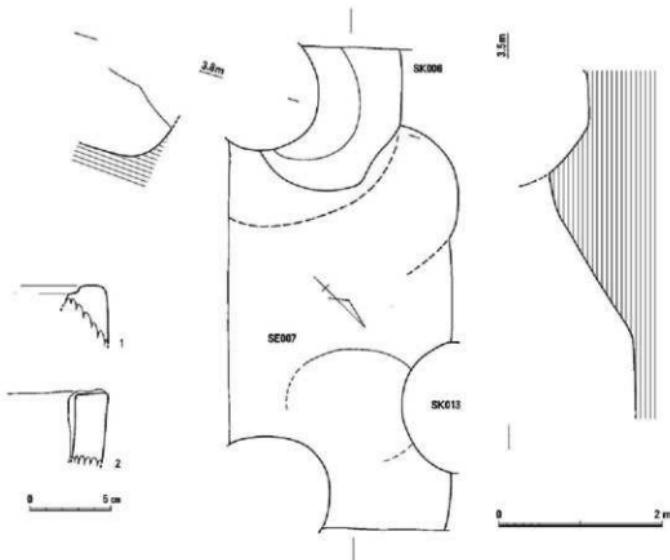


図5 SK006・SE007 (1/60, 1/3)

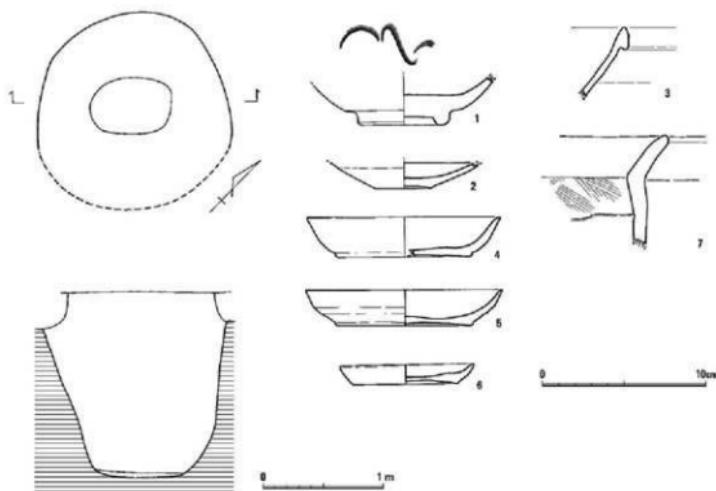


図6 SK013 (1/40, 1/3)

**出土遺物** 1は龍泉窯系青磁碗底部片である。内面に片彫文を施す。1類に相当する。2は青磁皿の底部片。3は白磁碗の口縁部片。玉縁を有している。碗IV類。4・5は土師器碗である。4は口径11.8cm、5は口径12.0cmをそれぞれ測る。底部はいずれも糸切りによる。6は土師器皿。口径8.1cm、底部は糸切りである。7は土師器甕口縁部片である。胴部はまっすぐに立ち上がり、口縁部が大きく外反する。内面に一部ハケ目調整が残る。

**SK015(図7)** 調査区東側に存在し、SK014、SK029を切り込んでいる。一辺1.4m程の方形を呈する土坑であり、深さ0.6mを測る。壁面の立ち上がりは垂直に近く、底面は平坦である。出土遺物には、白磁や青磁等の小片が含まれるのみ。時期の詳細は不明だが、遺物をみる限りにおいては12世紀後半頃に位置づけることができようか。

**SK016(図7)** 調査区の東側に存在する。一部をSK080に切り込まれる。多くの土坑と切り合い関係にあり、平面形の把握に苦慮したが、1.5×1.2m程の長方形を呈するものと考えている。底面は平坦で、壁面の立ち上がりはなだらかである。深さは0.6mを測る。埋土の上部には暗褐色砂質土、下部は暗褐色砂質土-黄褐色砂が互層状に堆積する。比較的まとまった量の遺物が出土しており、出土遺物、そしてSK080との切り合い関係を重視すれば、12世紀後半に比定できるだろう。だが、遺物に関しては、多くの切り合い関係をみれば、他遺構よりの混入も否定できない。

**出土遺物** 1～5は白磁碗である。1・2は外反する口縁部を有するもので、1・2は細く高い高台を有する。4・5は底部片。いずれも1・2に比してやや低い高台を有し、内面見込み部分の輪を輪状に掻き取っている。尚、2は高台内面に墨書きを有する(判読不能)。1～3は碗V類、4・5は碗VI類それ相当地。6は白磁壺の底部片。8は越州窯系青磁壺の底部片。9は磁州窯系綠釉陶器の盤底部片。7は綠釉陶器の底部片。

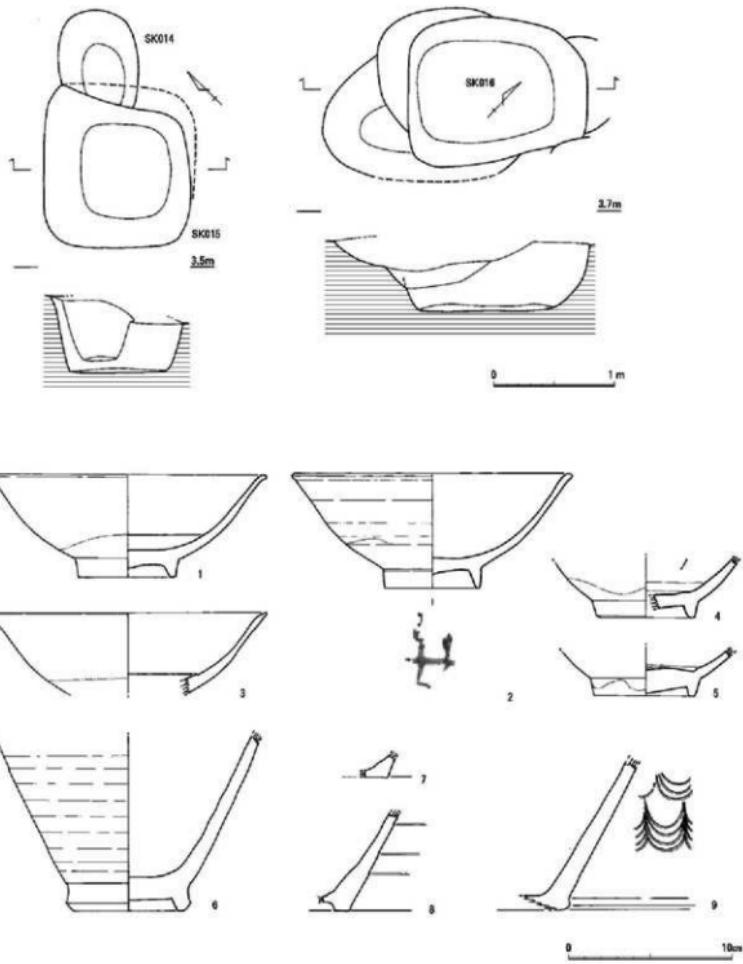


図7 SK015・016 (1/40、1/3)

SK021(図8) 調査区北東側端部に存在する。一部をSK033に切り込まれる。平面は径1m程の円形を呈し、深さ0.8mを測る。壁面の立ち上がりは垂直で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色砂質土。この土坑上層からは、水注、耳壺、盤といった陶器が一括して出土している(図8)。これら上層出土資料には白磁等も含まれている。

一方、下層からは陶磁器片、土師器片等がわずかに認められるのみである（9・10）。特に資料9は激しくローリングを受けている。下層出土の遺物が12世紀代に位置づけられること、そして一括資料の年代観から、この土坑は12世紀後半～13世紀に位置づけることができるだろう。

**出土遺物（図9）** 1～8が上層出土資料、9・10が下層出土資料である。1は水注である。釉は緑黄色を呈し、注口を持ち、その反対側には把手を付している。把手の外面には縦方向の沈線を2条施している。注口～把手に直交する肩部には、縦形の耳が少なくとも1つは認められる。口縁部は短く外側に屈曲させ、頸部は下方へ向かって緩やかに開き、胴部との境には、わずかな段をなす。頸基部そして肩部には、沈線をそれぞれ1条ずつ巡らしている。胴部外面の下半には回転ヘラ削りを施す。底部は輪状高台で、高台内面には墨書を有する（判読不能）。IV類に属する。2は四耳壺である。口径21.2cmを測る。外面および口縁部内面にのみ施釉し、内面の釉は一部を搔き取っている。釉は緑黄色を呈し、外面肩部には暗茶褐色の釉を流している。口縁部は玉縁状に肥厚しており、頸部はほぼ垂直に立ち上がる。肩部には横形の四耳を有し、耳の外面には2条の沈線を横方向に施している。肩部の張りは弱い。III類に属する。3・4は盤である。3は口径（復元）33.6cmを測る。釉は緑黄色を呈し、口唇部の釉は拭き取られ、内面にのみ釉が認められる。外面露胎部は淡赤褐色を呈する。口縁部は断面T字状をなし、内外面へ短く張り出している。尚、口縁部上面には目跡が残る。体部はわずかに丸みを帯びる。4は口径（復元）32.7cmを測る。形態その他の特徴は3に等しい。4の底面外側には墨書が認められる。3・4共にII類に相当する。5～8は白磁である。5は碗で、細く高い高台を有し、口縁端部は外方へ鋭く張り出している。V～4類に相当する。6は碗口縁部片で、玉縁を有する。IV類に相当する。7・8は底部片で、いずれも高台の削り出しは浅く、底面は厚い。底部内面には沈線が1条巡っている。いずれもIV類に相当する。9は龍泉窯系青磁碗の底部片で、高台内面の削りが浅く、底部は厚い。内面には一部模様文が認められる。I類に相当する。10は青白磁の小碗底部片で、外面には粗い模様文を施す。

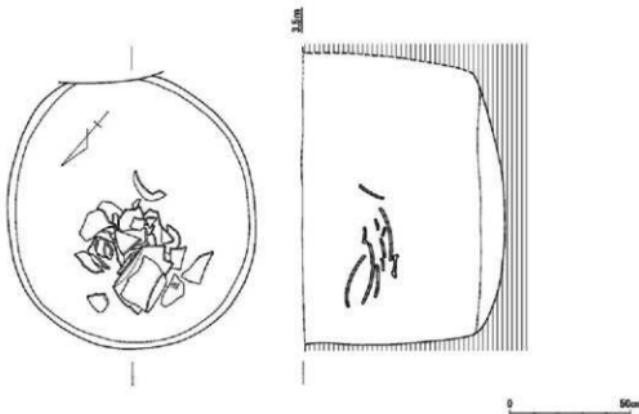


図8 SK021 (1/20)

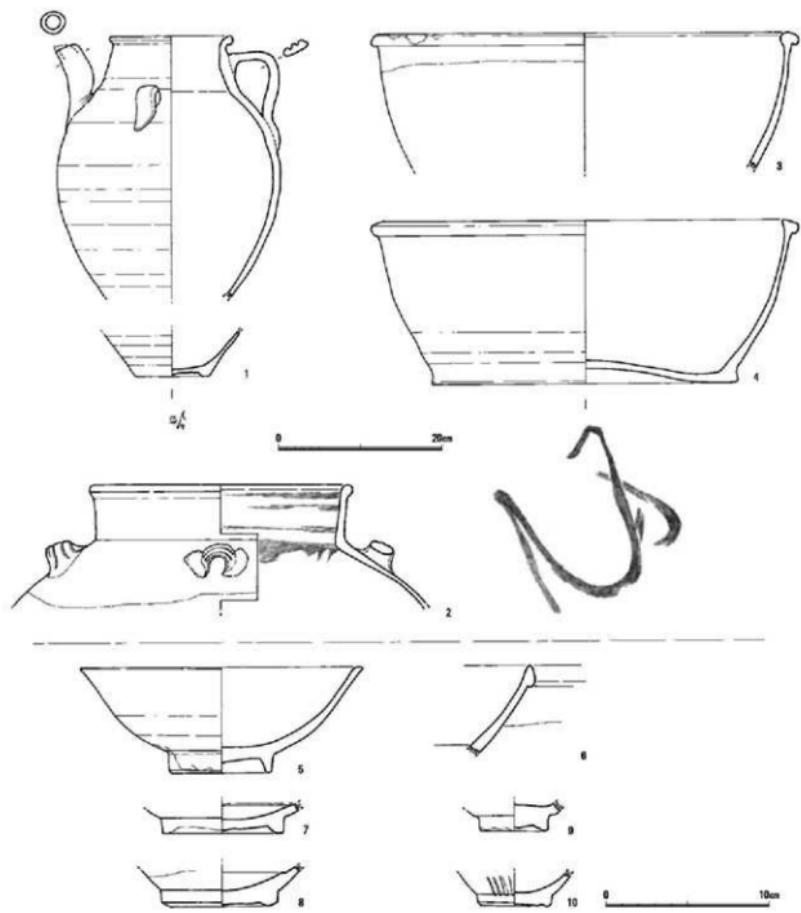


図9 SK021出土遺物 (1/6, 1/3)

SK022(図10) 調査区北東側に存在する大形の土坑である。SK023等に切り込まれる。壁面の立ち上がりは比較的なだらかであり、底面は狭い。明確な痕跡は確認していないが、この土坑は井戸である可能性が高い。底面の標高は1.4mを測る。土坑内には、暗黄褐色砂質土と黒褐色砂質土が互層状に堆積している。大形の割に出土遺物は少ないが、遺物はおおむね12世紀後半の特徴を示す。

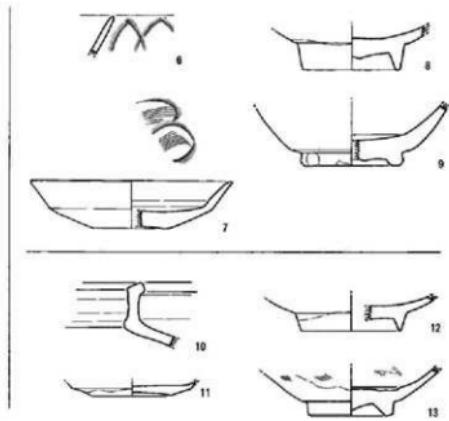
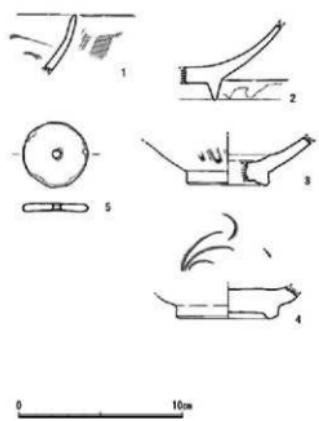
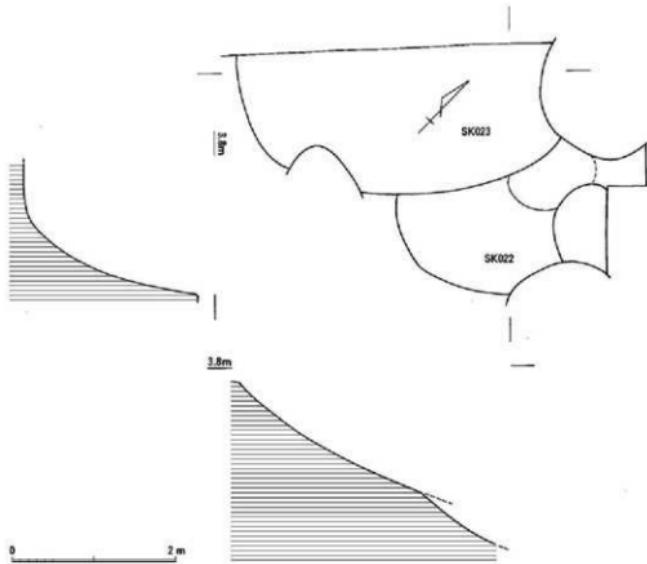


図10 SK022・023 (1/6、1/3)

**出土遺物** 1は同安窯系青磁碗口縁部片である。外面には細かい柳目文を施す。楕I類に属する。2は白磁碗底部片で、細く高い高台を有している。楕V類。3は白磁碗底部片で、内面には段を有する。外面には片彫りによる縱線、柳目文をそれぞれみることができる。4は龍泉窯系青磁碗で、高台部削り出しの弱い、肉厚の底部を有する。内面見込み部分にはヘラによる片彫花文を施している。I類に属する。5は瓦玉。径4.0cmの円形を呈し、中央には径5mmの孔を有する。

**SK023(図10)** 調査区北東端部に存在する大形の土坑である。SK022を切り込んでいる。壁面の立ち上がりはなだらかで、底面は調査区外に存在しており、確認できなかった。SK023は井戸である可能性が高い。内部には、暗黄褐色砂質土、黒褐色砂質土が互層状に堆積する。出土遺物をみれば、この造構は13世紀前半に位置づけることができるだろう。

**出土遺物** 6は龍泉窯系青磁碗口縁部片である。外面には片彫による蓮弁文を描く。II-a類に相当する。7は龍泉窯系青磁皿で、内面見込み部分には片彫花文と柳目文を施している。8は白磁碗底部片で、細く高い高台を有する。V類に属する。9は越州窯系青磁碗底部片で、高台部には目跡が残る。なお、SK022とSK023の切り合い確認中に、帰属の不明な遺物もいくつか生み出しましたため、ここで報告したい。10は白磁壺口縁部片。外面及び口唇部に施釉し、内面の釉は拭き取っている。頸部はまっすぐに立ち上がり、口縁部は外方へ折れ短く突出する。肩部には横形の耳を有している。11は龍泉窯系青磁皿の底部片である。体部は途中で屈曲する。底面付近には回転ヘラ削りを施す。12は白磁碗底部片。細く高い高台を有する。楕V類。13は同安窯系青磁碗の底部片。内面見込みと体部の境には段を有する。内・外面上には柳目による文様が認められる。楕I類に属する。

**SK027(図11)** 調査区東側に存在する大形の土坑で、SK023・026に切り込まれる。平面は径2.5mの円形を呈し、深さは1.9mを測る。底面の標高は1.8m。壁面の立ち上がりは比較的急であり、途中で段をなしている。底面は比較的広く平坦である。内部には暗褐色砂質土と黄褐色砂が互層状に堆積している。出土遺物より、12世紀後半に位置づけることができるだろう。

**出土遺物** 1は白磁碗口縁部片である。口縁部には小振りの玉縁を有する。2・3は白磁碗底部片。2は内面見込み部分の釉を輪状に削りとるもので、V類に属する。4は龍泉窯系青磁碗底部片である。5は同安窯系青磁皿で、体部途中で屈曲し、その後、緩やかに外反しながらのびる。内面の屈曲部分はわずかに段をなしている。内面見込み部分には柳描文とジグザグ状の櫛点描文を有する。I類に属する。

**SK037(図12)** 調査区中央やや東寄りに検出した土坑であり、平面は一辺1.4mの方形を呈する。深さは20cmにも満たない浅いもので、造構の遺存状況は悪い。この造構はSK084の直上に営まれている。底面は平坦に仕上げられており、四隅には石材が検出できた。南側のみ2石、他には1石ずつが配置されている。石材間は1.1~1.2mを測る。木質等は検出していないが、博多124次調査のSK189等の所見(田上編2004)をみると、これら石材は礎石として機能していたのだろう。出土遺物は少ないが、16世紀頃の造構とみて良いだろう。

田上勇一郎編2004『博多87J』—博多遺跡群第124次調査の報告—福岡市埋蔵文化財調査報告書 第758集

**出土遺物** 1は瓦質のすり鉢底部片である。磨り目は摩耗が著しい。

**SK048(図13)** 調査区中央やや東寄りに検出した土坑である。ややいびつであるが、本来、平面は円形を呈していたのであろう。調査時の検出高では径1.7m程に復元できようか。壁面の立ち上がりは急で、上半部では垂直に近い。底面は比較的広く、平坦である。深さは1.2m程で、底面の標高は2.1mを測る。比較的まとまった量の陶磁器等が出土しており、それら遺物をみれば、SK048は12世紀前半に位置づけることができるだろう。

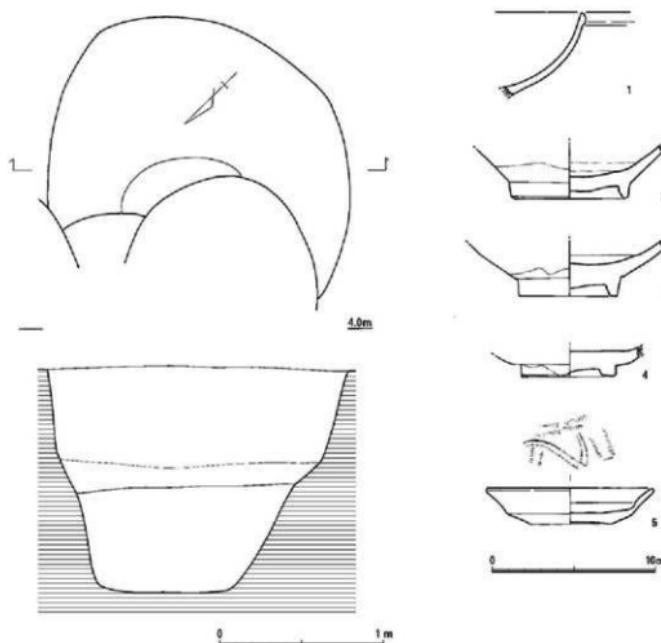


図11 SK027 (1/40、1/3)

**出土遺物** 1～3、6・7は白磁碗である。

1は細く高い高台を持つもので、口縁端部は丸くおさめる。V類に属する。2・3は口縁部に玉縁を有するもので、高台は低く、底部は厚みを帯びる。IV類に相当する。6・7は底部片で、いずれも、低く幅広の高台を有している。底面はやや厚みがある。6は内面に沈線を巡らしている。4・5は白磁皿である。低い高台を有し、内面の削り込みは浅い。4は内面に柳描文を有する。いずれもVI類に相当する。8は越州窯系青磁碗の底部片である。底部内面に沈線を巡らしている。高台内に目跡が残る。III類に相当する。9は丸瓦片。凸面には斜格子のタタキ痕が残る。

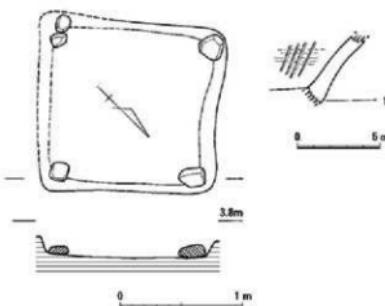


図12 SK037 (1/40、1/3)

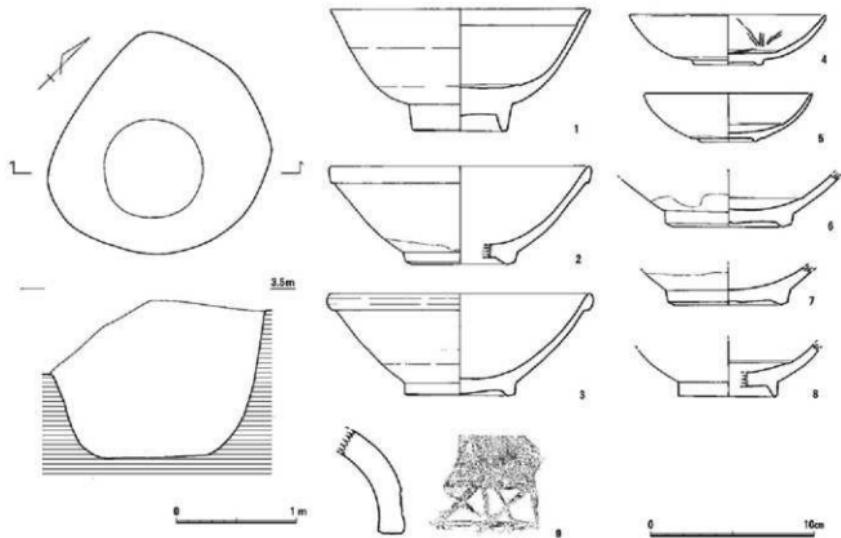


図13 SK048 (1/40、1/3)

**SK080 (図14)** 調査区東側に存在し、SD020、SK012・016を切り込んでいる。平面は一辺1m程のいびつな方形を呈しているが、底面へ向かうにつれて一辺0.7mの方形を呈するようになる。隅角もしっかりと保たれており、本来は木枠が存在していたのだろう。しかし、木質等の痕跡は確認していない。深さは1m程で、底面の標高は2.5m。底面中央には浅い凹みがある。この土坑は井戸であった可能性も考えておきたい。11世紀後半～12世紀前半に位置づけることができる。

**出土遺物** 1は丸底杯である。口径15.0cmを測る。2は白磁皿である。内面見込み部分は段を有し、底面はわずかに上げ底をなす。3は白磁碗口縁部片である。内面には白堆線が認められる。II類に相当する。

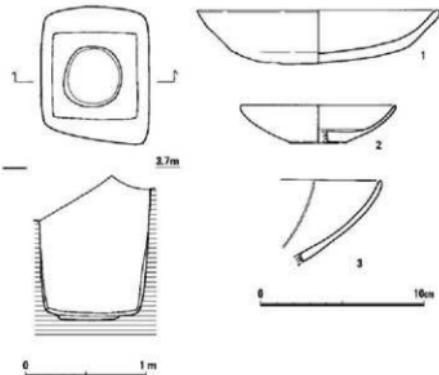


図14 SK080 (1/40、1/3)

**SK084** (図15) 調査区中央やや東寄り、SK037下に存在する土坑である。平面は径1.1~1.2mの円形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、深さは0.7m程である。底面は標高2.8mで、ほぼ平坦。埋土は暗褐色砂質土。

**出土遺物** 1・2は土師器碗である。1は口径12.5cm、2は口径(復元)14.0cmをそれぞれ測る。いずれも底面は糸切りによる。ところで、この土坑からは弥生時代後期の器台(3)も出土している。3は口径13.2cm、器高15.4cmを測る。

**SK096** (図16) 調査区中央やや西よりに存在する。平面は一辺1.3m程のいびつな方形であるが、底面近くでは、一辺1.1mの方形を呈するようになる。各辺は直線的であり、本来、土坑の中には木枠が存在したのだろう。しかし痕跡は確認していない。深さは0.6m程で、底面の標高は2.7mである。底面の中央はわずかな凹みが存在する。出土遺物より、12世紀前半に位置づけることができる。

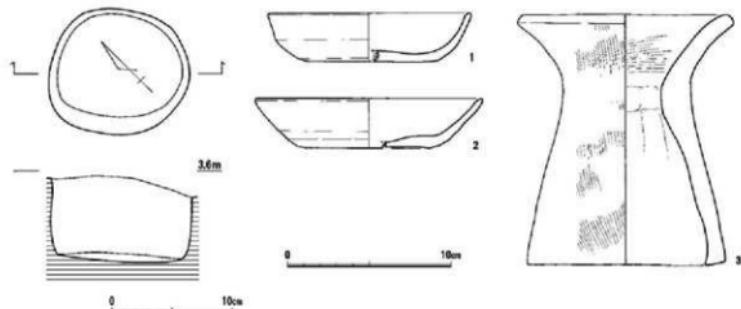


図15 SK084 (1/40, 1/3)

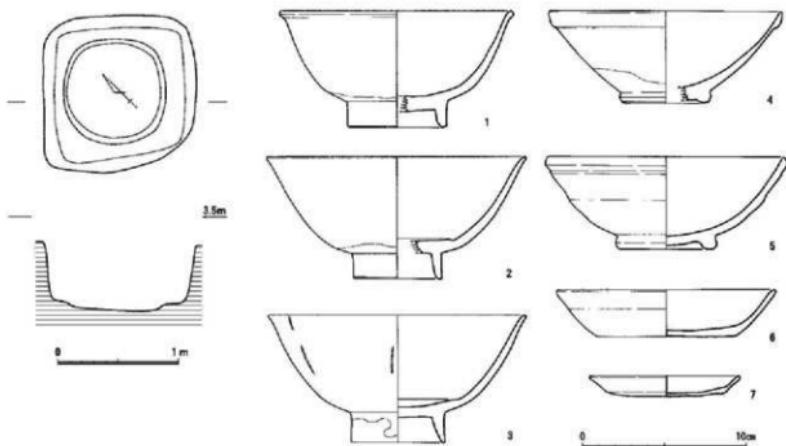


図16 SK096 (1/40, 1/3)

**出土遺物** 1～4は白磁碗である。1～3は細く高い高台を有するもので、口縁端部がわずかに肥厚し外反するもの(1)、端部を鋭く仕上げるもの(2)、わずかに外反させ、端部は丸く収めるもの(3)がある。2・3は内面見込み部分に段を有する。いずれもV類に相当する。4は口縁部に玉縁を有するもので、いずれも高台は低く、内面の削り込みは浅い。共にIV類に属する。5は白磁を模倣した土師碗。6は土師器碗で口径(復元)13.2cmを測る。底面は糸切りによる。7は土師器皿で、口径9.0cm。底面はヘラ切りによる。

**SK111(図17)** 調査区西側に存在するもので、SK112を切り込んでいる。平面は径1.5m程の円形を呈しているが、底面は一辺0.8m程の平面方形をなしており、この土坑もSK015等と同じく、木枠が存在した可能性を考えておきたい。深さは0.4mを測り、底面は平坦で標高は2.6m。壁面の立ち上がりは緩やかである。出土遺物は少なく、小片のみであるので、図化はおこなっていない。白磁、青磁が出土しているので、12世紀後半に位置づけることができようか。

**SK112(図17)** 調査区西側に存在するもので、SK111に切り込まれている。平面は径1.6m程の円形を呈する。土坑の西側は2段の掘り込みとなっているが、これは他遺構の切り込みを見落としている可能性もある。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦。深さは0.5m程で、底面の標高は2.6mを測る。出土遺物は少なく、小片のみであるので、図化はおこなっていない。白磁、青磁が出土しているので、12世紀後半に位置づけることができようか。SK111とは切り合い関係にあるが、両者ともさほど変わらない時期に営まれたのだろう。

**SK113(図18)** 調査区西側に存在するもので、SK112・114・119を切り込んでいる。平面は一辺1.7～1.8mの方形を呈し、深さは1m程。壁面は上半部がやや崩れているが、下半部はほぼ垂直に近い立ち上がりを保っている。底面は一辺1.3mの方形を呈しており、この土坑にも本来、木枠が存在していたのだろう。その四隅にはピットが存在しており、枠を支えるための柱をこの位置に想定できる。尚、底面は標高2.1mを測り、中央部にはわずかな凹みが存在している。出土遺物には他遺構のものが混在している可能性も高く、問題が無いわけではないが、出土遺物より、ここではSK113を13世紀前半のものと考えておきたい。

**出土遺物** 1は白磁碗で、高い高台を有する。内面の削り込みは浅く、底面は厚みがある。内面見込み部分には段を有する。V類に相当する。2・3は龍泉窯系青磁碗である。2は外面に錦運弁文を有するもので、高台は低く、内面の削り込みは浅い。II類に相当する。3は底部片。内面見込み部分には「金玉満堂」の印文がある。高台は低い。I類に属する。

**SK120(図19)** 調査区西側に存在するもので、SK119を切り込み、SK131に切り込まれている。平面は2.2×2.2mの梢円形を呈しているのであるが、南西側の壁面に存在する段は他遺構の切り込みによる可能性も高く、とすればこの土坑は径2.2mの平面円形を呈するものといえよう。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は中央に向かってくぼんでおり、すり鉢状を呈している。深さは1.2m、標高は1.9mである。出土遺物より、11世紀後半～12世紀前半に位置づけることができるだろう。

**出土遺物** 1～3は白磁碗である。1は細く高い高台を有し、口縁部はわずかに外反している。V類に相当する。2は口縁部に玉縁を有するもので、高台は低い。IV類。3は底部片で、細く高い高台を有している。V類。4は越州窯系青磁碗底部片である。「ハ」の字に開く高台を有し、内面見込み部分には片彫による花文を施している。II類。5・6は丸底杯である。6は体部途中でわずかに屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。端部はわずかに肥厚する。5は口径(復元)14.2cm、6は口径(復元)14.6cmを測る。7～9は土師器皿である。7・8は底面ヘラ切り。9は底面糸切りによる。7は口径9.2cm、8は口径9.2cm、9は口径7.6cmをそれぞれ測る。

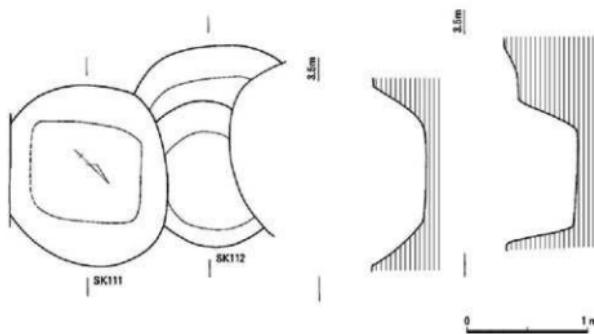


図17 SK111・112 (1/40)

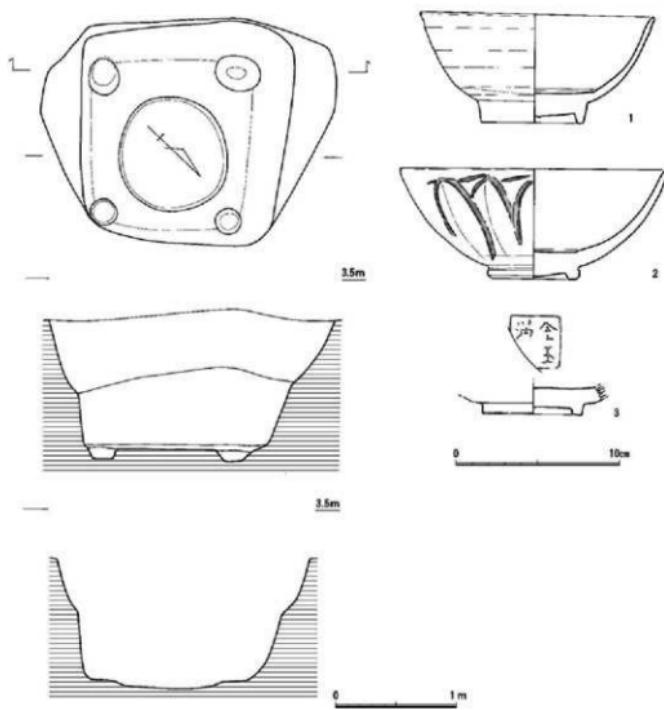


図18 SK113 (1/40, 1/3)

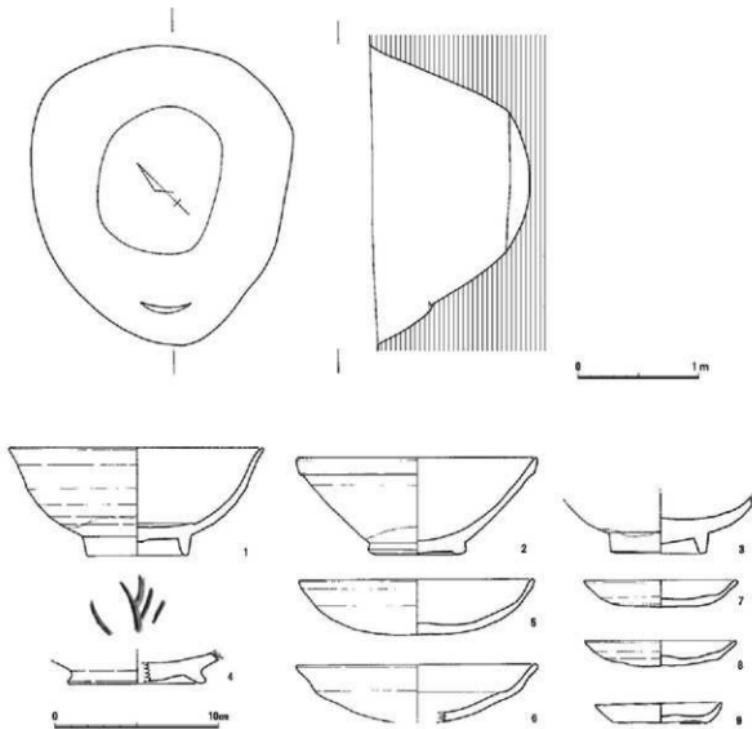


図19 SK120 (1/40, 1/3)

**SK124 (図20)** 調査区西側に存在し、SK123を切り込み、SK127に切られている。土坑の一部が調査区外に存在しており、全体の形状は不明だが、平面は一辺1.5m程の方形を呈するものだろう。底面近くでは一辺1mの平面方形を呈するようになり、この土坑にも本来木枠が存在したものといえる。底面四隅にはそれぞれピットが存在しており、木枠を支える柱の存在が想定できる。深さは1m、底面の標高は2.3mを測る。壁面の立ち上がりは急で、垂直に近い。出土遺物より、12世紀後半に位置づけることができる。

**出土遺物** 1は越州窯系青磁碗である。高台内には一部目跡が残る。Ⅲ類に相当する。2は青磁小碗である。高台は低く、径は小さい。内面には櫛刃による文様を描いている。

**SK127 (図21)** 調査区東端に位置し、SK123を切り込んでいる。平面は径1.3~1.5mの円形を呈し、深さ0.6mを測る。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。底面の標高は2.8m。出土遺物より、11世紀後半~12世紀前半に位置づけることができる。

**出土遺物** 1は白磁碗である。杯部は浅く、底面には細く高い高台を有する。内面には短い櫛目文を施す。VI類に相当する。2は陶器盤である。鉗状の口縁部を有し、底面は平底である。内面と口縁部外面に施釉し、口縁内面の釉の多くは拭き取られている。内面には褐釉による施文が認められる。I類に相当する。

**SK130 (図22)** 調査区西端に存在し、SK127・131を切り込んでいる。平面は9.4×6.3mのいびつな楕円形を呈し、深さは10cmにも満たない浅いもので、遺構の遺存状況は悪い。土坑の中には瓦質のすり鉢、が出土している。出土遺物より、16世紀に位置づけることができる。

**出土遺物** 1は瓦質のすり鉢である。口縁部は内傾し、端部は上方へ立ち上がる。外面には一部ハケ目が残り、内面には4本を1単位とするすり目を有する。2は深鉢口縁部片である。外面の口縁部下に2条の突帯を有し、口縁端部は平坦に仕上げている。

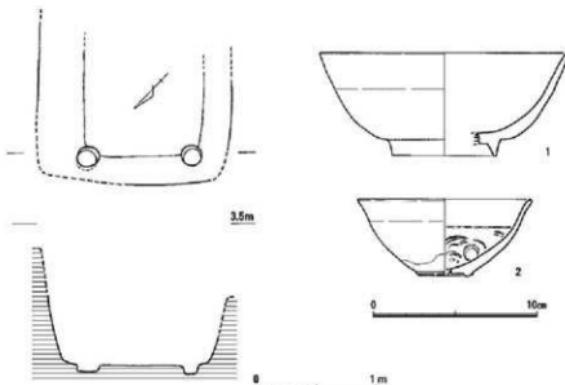


図20 SK124 (1/40, 1/3)

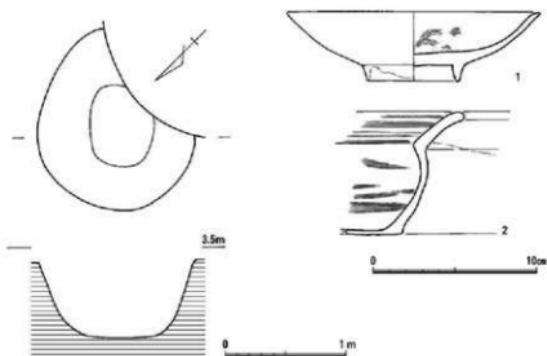


図21 SK127 (1/40, 1/3)

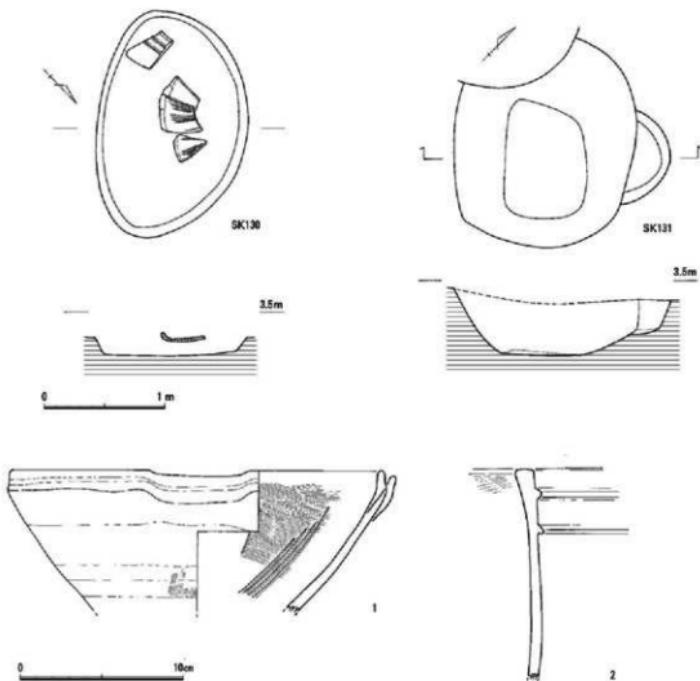


図22 SK130・131 (1/40、1/3)

**SK131 (図22)** 調査区西端に存在し、SK129・130に切り込まれる。1.5×1.8mの平面梢円形を呈し、深さは0.6mを測る。壁面の立ち上がりはゆるやかである。出土遺物は白磁、青磁等があるが、量は少なく、図化はおこなっていない。12世紀後半に位置づけることができるだろう。

## 2) SD(溝)

当調査では溝を2条検出した (SD020・040・054、SD009)。SD009は後に述べるSD020・040・054に直交する溝で、調査区東側に存在している。ごく短く、2m程確認したのみだが、断面逆台形を呈し、深さ0.5mを測る。堀方もしっかりとしたもので、溝であることは確かであろう。出土遺物は少ないが、白磁等が出土しており、12世紀代に位置づけることができようか。

**SD020・040・054 (図24)** 調査区中央を縦断する溝である。他の造構に切り込まれ、各所で寸断されており、個別の造構番号を付しているが (020・040・054)、これらは本来一続きの溝と考えて良いだろう。溝は直線的に北東-南西方向 ( $N-48^{\circ}-E$ ) へのびている。埋土は黒褐色砂質土で、わずかではあるが黄褐色砂がブロック状に混入している。この溝が切り込んだ造構は検出しておらず、今回検出したST052を除く造構の中で最も古い可能性が高い。北東側の溝 (SD020) は掘り込みが

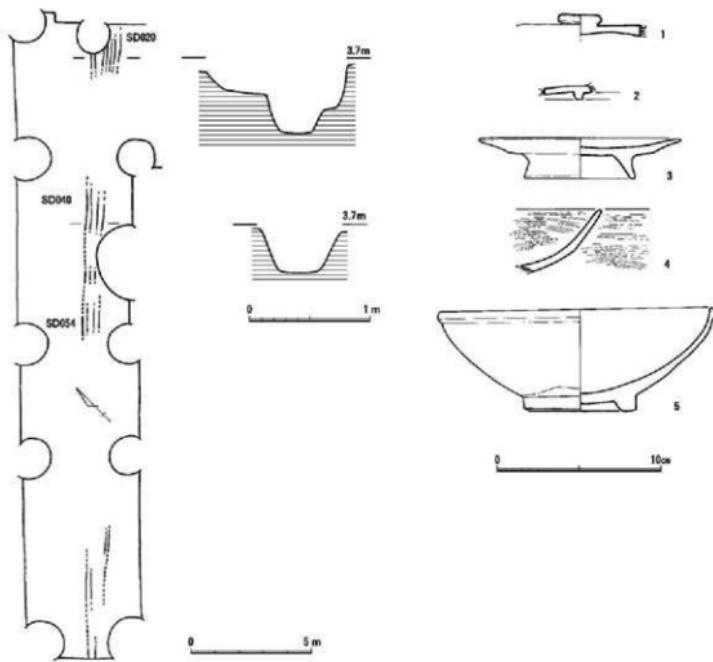


図23 SD020・040・054 (1/200、1/40、1/3)

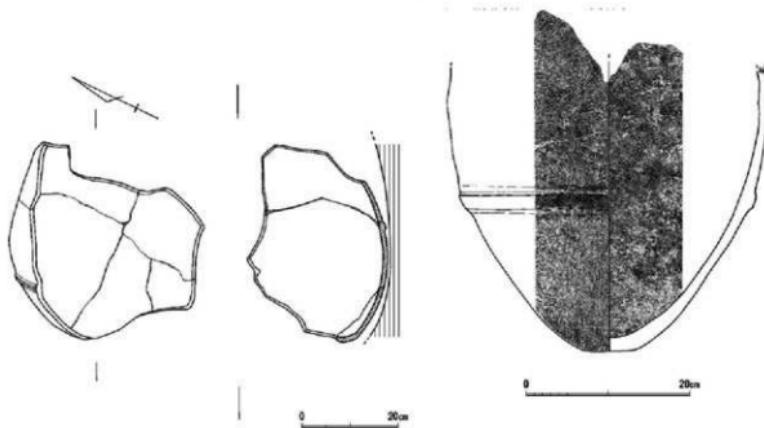


図24 ST052 (1/10、/6)

2段になっているが、他の部分では断面逆台形を呈する1段の掘り込みとなっており、2段の掘り込みは他造構との切り合いの誤認による結果である可能性も高い。溝の立ち上がりは急でしっかりとしており、底面の標高は36.2~36.6mとややばらつきが認められる。

出土遺物も少なく、また他造構との切り合いが激しいため、年代の決め手に欠く。SD054から出土した白磁は、11世紀後半~12世紀前半に位置づけることができるものであるが、他造構の年代も近似したものが多く、またそれら造構よりはこの溝が確実にさかのぼることから、この遺物は混入品と考えておきたい。SD020からは須恵器(1・2)や土師器(3・4)が出土しており、前者は8世紀、後者は10世紀にそれぞれ位置づけることができる。ここでは溝の時期を後者(10世紀)と捉えておきたい。ただ、当調査区では他にも8世紀代の須恵器がいくつか出土しており、当該期の造構の存在、そしてこの溝が8世紀段階にさかのぼる可能性も否定できない。

**出土遺物** 1は須恵器杯蓋である。天井部にはつまみを付している。2は須恵器杯底部片で、底部には高台を有する。3は台付皿で台部は「ハ」の字に開き、杯部外表面は半ばで段をなしている。4は丸底杯の口縁部片。内・外表面にヘラミガキを施している。5は白磁碗。口縁部には小さな玉縁を有する。体部は内渦し丸みを帯びている。II類に相当する。

### 3) ST(甕棺墓)

当調査区では弥生時代の甕棺墓を1基のみ確認した。当調査区内において、弥生~古墳時代の遺物もいくつか出土しており、周辺においても当該期の造構が広がっていた可能性も高い。

**ST052(図24)** 調査区のほぼ中央に位置し、SK004・098に切り込まれている。甕棺は多くを破壊され、胴部を検出したにとどまった。墓坑の幅方一部を残すのみである。甕棺墓は主軸をN-62°-Eにとり、ほぼ水平に埋置している。単棺である可能性が高い。

**出土遺物** 1は甕棺である。胴部下方に幅広の突帶を一条巡らしている。内・外器面共にハケ目調整を施す。底部はわずかに平底を呈する。弥生時代終末に位置づけることができるだろう。

### 4) その他の遺物

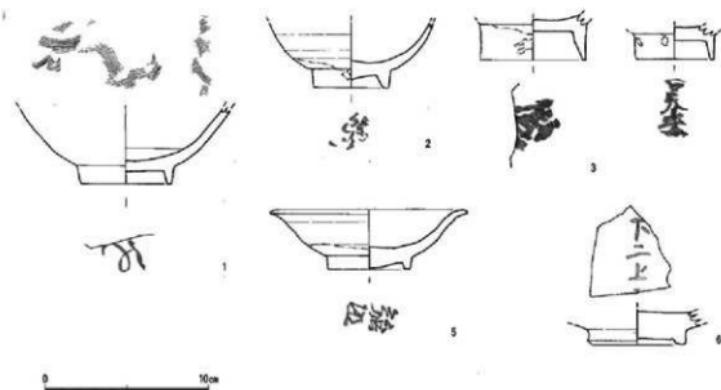
ここではこれまで報告できなかった、若干の遺物について報告をおこなう(図25)。

1~5は墨書き器である。白磁の高台内にかかれているもので、5は「強皿」と記されているが、多くは判読できない。6は龍泉窯系青磁碗(I類)の内面見込み部分に、刻書が認められる。「下二上口」と読める。造構面切り下げ中に出土。7は土師器甕。肩部に刺突文を施している。8は越州窯系青磁壺口縁部片。9は磁州窯系綠釉陶器。10は白磁碗。内面を褐色の釉で施文する。

## IV.まとめ

ここでは今次調査の成果についてまとめるにすることにする。

今次調査で確認された造構で、最も時期のさかのぼるものはST052(甕棺墓)で、弥生時代終末に位置づけることができる。この他、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が調査区内で散見されることを考えれば、この時期の造構がある程度存在する可能性は常に考えるべきだろう。また、甕棺墓の発見は博多遺跡群の冷泉町地区においては第148次調査に引き続いで2例目となった。このことは、決して濃密な分布を示すものではないが、この時期における墓域としてこの周辺が使用されていたことを示すのだろう。



0 10cm

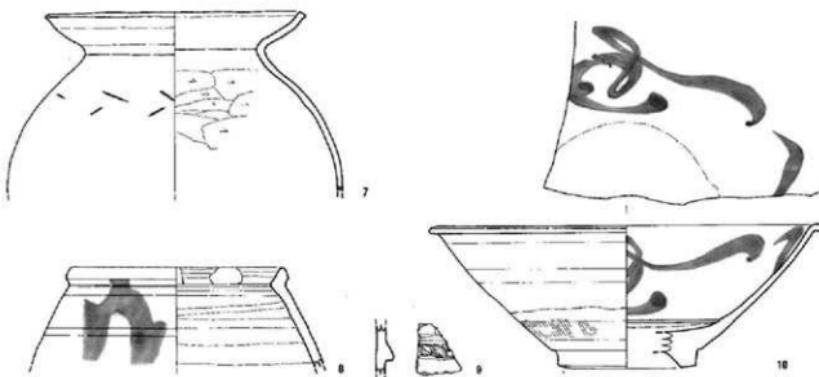
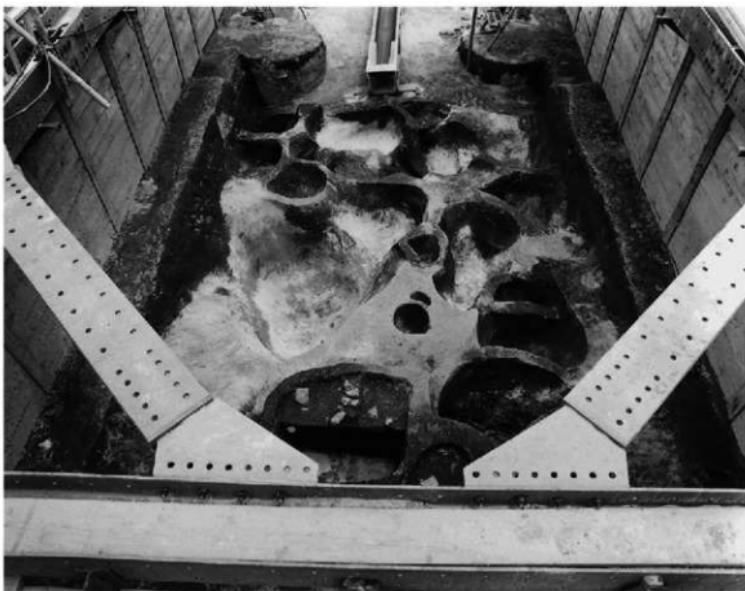


図25 その他の遺物 (1/3)

今回の調査では白磁（梶IV・V類）、龍泉窯系青磁（梶I類）や同安窯系青磁を主体とする12世紀代の造構が中心とし、龍泉窯系青磁（梶III類）などが含まれる13世紀前半の造構、16世紀代の造構が散見される状況であった。これは当調査区周辺の調査成果と変わるものではない。これ以外の時期の造構として、重要なものにSD020を挙げることができるだろう。調査の不手際から、時期を確定することはできなかったが、当調査区で主体をなす諸造構よりさかのぼることは確実であると考えている。その時期比定と性格究明が今後の課題といえようか。



調査区北側 1（北東から）



調査区南側 1（南西から）

図版2



調査区北側2（南から）



調査区北側3（北東から）



調査区北東側（北西から）



調査区南側 2（南西から）



SK037 (北西から)



SK048 (北西から)



ST052 (東から)



SK080 (南東から)



SK084 (北西から)



SK096 (南から)



SK124（南東から）



SK127（南東から）



SK048周辺（北西から）



SK004（北西から）



SK006（北西から）



SK021（北東から）



出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	はかた						
書名	博多117						
副書名	博多遺跡群 第162次調査報告						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第947集						
編著者名	藏富士 寛						
発行機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-4 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2007.03.30						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ○○°	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
はかた 博多遺跡群	ふりがな 福岡県福岡市博多区 冷泉町422	4013	0121	33° 35' 41" 130° 24' 42"	20060501 ~ 20060621	190.7	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
博多遺跡群	集落 墓地	古代末～中世 弥生	井戸 3 土坑 125 溝 2 甕棺墓 1	輸入陶磁器 国産陶磁器 土師器 瓦 瓦質土器 須恵器 弥生土器			
要旨	今回の調査では、12世紀代の遺構を中心とし、13世紀前半、16世紀代の各遺構を検出できた。これは周辺の調査事例と大きく異なるものではない。遺構の中で、最もさかのぼるものはST052（甕棺墓）で、弥生時代終末に位置づけることができる。また、これ以外の重要遺構として、SD020を挙げることができる。時期を確定することはできなかったが、当調査区で主体をなす諸遺構よりさかのぼることは確実であり、その時期比定と性格究明が今後の課題といえるだろう。						

## 博多117

-博多遺跡群 第162次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第947集

2007(平成19年) 3月30日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有大進印刷

福岡市中央区平和五丁目21-6



遺跡名 遺跡略号 圖案番号  
博多遺跡群第162次 HKT-162 0 6 1 2